

学力の基礎研究所だより

学力の基礎をきたえどの子も伸ばす研究会付属研究所

久保 齋

前半の100日、後半の100日 優れたシステムを創造する

私は「先生のための学校、クラスづくり、授業づくり教室」(小学館MOOK)で前半の100日でのクラスづくりと授業づくりをDVDの映像も含めて提案しました。その「クラスづくりの基本構想の章には次のような記述があります。

『この章で示すのは「久保のクラスづくりの100日実践」です。私の方法は、子どもたちに私のやり方をしっかり教え、形をまず模倣させることでクラスを軌道にのせ、そのあと、形はそのままだに内容を深化させていくというものです。新任の先生はまず、私が示した4～6月の実践を子どもたちがスムーズにできるようになるまで、じっくりと続けてください。そのまま1年続けても十分な成果があります。7～8年目の先生やベテランの先生は、なぜ私がそのような実践をするかに耳を傾けてください。そして、自分のクラスづくりのたたき台にしていただけたら幸いです。』

さて、このような100日続けると、子どもたちにどのような変化がおこってくるのか。そこには明らかな変化が起こってきます。例えば、学力の基礎である「読み書き計算」の分野では、音読や計算はほぼ完璧に、漢字では朝学習で「完璧写し」「うそテスト」「本テスト」を3日のサイクルで繰り返すだけで8割の子が満点に、後の子どもたちもそれに引きずられる形で80点90点を取り続けるようになります。朝学習は日直の国語大臣の「準備はいいですか。一番、羊の群を追う。二番・・・。今日ほうそテストなので隣の人と交換して○をつけてください。」という聴写という高度な方法で進められていきます。話す力、聞く力も朝の会での「今日頑張りたいこと」、帰りの会の「今日頑張ったこと」の発表で4文、5文の複文構造で話すことが日常的にたんと鍛えられています。

授業では子どもたちはどんどん発表し、「僕は○○と考えているのですが健太くんはぼくの考えについてどう考えますか」というような発言が自然にでてくるようになっていきます。つい最近やった『白いぼうし』では予習することを通して、授業規律の到達度ステップ⑤『学習課題をもって授業に参加し、教師、友達とともに授業をつくることのできる。自分の意見・友達の意見を大切に、課題を深める発言ができ、授業づくりについての評価ができる』の域に達することができたように思います。

私は怠け者で、特別シャキリキになって実践している訳ではないのですが、他の4年生と比べれば違いは歴然です。そのポイントはシステムの違いによるものが大きいと感じます。人間は弱いものです。いつも、いつも高いテンションを維持するのは難しいのです。でも優れたシステムをクラスの子どもたちに提起し、実現させておけば子どもたちはかつてにどんどん成長していきます。優れたシステムはそういうものです。

自己と自治の完成 再びヴィゴツキー

このレベルに達すると子どもたちに明らかな変化が起こってきます。まず自覚的に自分を鍛えようとする子たちが現れ、それが集団としての意思を持つようになります。掃除のために机を引いたスペースで、側転やロンダート、立ちブリッジ、倒立ブリッジ、前方倒立回転がどんどん行われ、子どもたちは遊びながら、友達とアドバイスしあったりしながら、自分を教育し、教育的変容を勝ち取ろうとします。学習においても目的意識的に自分を伸ばすための努力が始まります。掃除をするときも、もう指示をする「掃除リーダー」を必要としなくなり、一言も話さないで黙々としかも手際よく掃除が進んでいきます。

このような子どもたちの変化を見逃さず、後半の100日の実践を始めなければなりません。もちろんこの「後半の100日の実践」は前半の100日が過ぎたらというのではなく、前半の100日のシステムでこのような変化を実現できたという意味あいです。

前半の100日実践の中にちりばめておいた自覚的自己実現の種と自治的自覚的行動の種が漸く芽を吹き出し、猛烈に成長を始めている。それが今の私のクラスです。

では、ここで何をすべきか。それは再び脳の話、前半の100日の時の脳の話は記憶や習熟の話が主でしたが（前出p18参照）今回は「人間が他の動物と比べものにならないくらい著しく発達している前頭連合野の働き、意志力、想像力、情操」の話をして、人間としてより優れた人間になろうと語りかけていきます。

『白いぼうし』で「松井さんのやさしさとは何か」を学習したのですが、「些細なことでも気づくこと」「物の向こうにある人の心に分かること」「そして行動にうつす力」そんなことも子どもたちには参考になったようです。

頑張り通す意思の力、人のことを思うやさしい心、仕事を見つけ出し行動する心、このような心を耕す学習が今から本格的に必要なになります。これをやることで前半の100日での子どもたちの実践をより自覚的なものへと深化させていくのです。

では何を教材とするのか。それは『学校つづり方』以外にはないでしょう。授業の時のこと、掃除のこと、給食の時のこと、みんなが共通に行っているときの思いを綴らせ、道徳の時間にじっくりと話し合っていきます。こうすればあの愚かしい「心のノート」ではない生きた道徳の学習が可能です。

もし、心の発達にも到達度評価が可能であるならば、心の発達にも「凛々しい個別化」と「豊かな交流」の場が保障されなければなりません。そして、心の発達にもヴィゴツキーの言う『発達の最近接領域』の考えが設定できるのであれば、「現下の到達のレベル」と「友達との共同や教師の援助によって到達可能な範囲」が設定でき、その範囲において、子どもたちは自覚的に、現実みを帯びて猛烈に自己を実現することが出来るはずです。

内田樹氏、村上春樹氏、平田治氏と4月から私の前に立て続けに現れた偉人たちの示唆によって、私は自分なりの教育システムを「読み書き計算」から「人格の完成」まで鳥瞰的に把握できたように思います。9月からの『先生のための学校』での語りを楽しみな今日この頃です。8月ゆっくり休んで、またともに頑張りましょう。